高野切第一種

十一世紀半ば／伝紀貫之（？～九四五）

（教科書96～97ページ）

古今倭歌集巻第一
春歌上

ふるとしにはるたちける日よめる
ありはらのもとかた
としのうちにはるはきにけりひと
ゝせをこぞとやいはむことしとやいはむ

1

はるのたちけるひよめる
きのつらゆき
そでひちてむすびしみづのこほれる
をはるがたけふのかぜやとくらむ

2

だいしらず
よみびとしらず
はるがすみたゝるやいづこみよしの
よしのゝやまにゆきはふりつゝ

3

二條のきさいのはるのはじめの
おほみうた
ゆきのうちにはるはきにけりうぐひす
のこほれるなみだいまやとくらむ

4

『古今和歌集』歌番号

大意

古今和歌集巻第一
春の歌・上

1

十二月中に立春を迎えた日に詠んだ歌
在原元方
年明け前に立春が来てしまった。この一年を、今はもう「去年」とよぼうか、それとも年内は「今年」というべきか。

2

立春の日に詠んだ歌
紀貫之
（夏の日に）袖をぬらしてこの手にすくった清水。冬の間凍りついていたあの清水を、立春の今日の風が解かしているだろうよ。

3

題不詳
作者不詳
春のかすみは、いったいどこに立ったというのだろうか。この（山深い）吉野の山にはまだ雪が降り続いているよ。

4

二条后が春の始めにお詠みになった歌
景色はまだ雪のままなのに、暦の上では春になった。寒さに凍っていたうぐいすの涙も、今はとけていることだろう。